

太田俊雄の「無意図的教育」考

鷹 澤 昭 一

1. はじめに

学校法人敬和学園の創立者の一人である初代校長太田俊雄（以下「太田」という）が高校創立に当たって、学園名を「敬和学園」とするとともに、教育モットーと6つの特色を掲げた（敬和学園高等学校説募金趣意書、1967.10.1）⁽¹⁾。その2番目に「人格教育・全人教育」として「知識・学力を重視するが、それだけにとどまらない。個人的な接触、小集団教育を通しての、心のにこる教育。円満な人格の錬磨。」つづいて「寮生活—教師と生徒、生徒同士の間のもっとも密接な交わりは、寝食を共にする寮生活によって深められる。」をあげている。太田が掲げた「敬和教育」は、「魂から魂へのこだま」⁽²⁾であり、「歌声は消えず」⁽³⁾であり、「感動のおこる時」⁽⁴⁾のような出会いであった。これら「無意図的教育」にこそ真の教育があると力説してやまなかった。以下、敬和学園高等学校（以下「敬和」という）の教育を主に太田の「無意図的教育」について考察する。

2. 無意図的教育

「敬和」2号の「太夫浜卓話」⁽⁵⁾に「なぜ寮教育は必要か」という小見出しのもと、無意図的教育について以下のように書いている。「人格教育とか、人格形成とかいうと、すぐ学力はつけないのか、と反問する人がある。知識や科学的技術を身につけること、しかもそれだけが学問であり、教育であるように考える人が多い。『魂から魂へこだまする』（詩人テニソンの詩句）歓びや感激の経験を校庭でもつことのできなかった人たちであろう。学問や技術は孤独の中でもものびるが、「人格は人生の激流の中でのみ育つ」と言ったのはゲーテだったろうか。教育は人と人とのふれあいの中におこるので、孤独の中におこる現象ではない。

教育は教師の意図的・計画的ないとなみであり、それだけであると考え人が多い。ところが、人間が徹底的に影響を与えられるのは、そういう意図的・計画的ないとなみを通してではなく、無意図的・無計画的な人と人とのふれ合いを通しての影響の方が、はるかに大きく、いつまでも残るものなのである。

この無意図的教育の重大さがわからなければ、寮教育の意義はわからないし、クリスチャン教師の必要性もわからないであろう。真の人間教育というのは、この無意図的教育の土台の上に、意図的教育が、いわば積み重ねられた形でなされるのであって、この両面が大切なのであるが、現代の一般教育の問題は、意図的・計的教育だけに重点がおかれてい

る点にあるのだ、とわたしは信じる。」

また、「敬和」第132号⁽⁶⁾には「教育という時、われわれはかんたんに、これを人間の意図的な営みと考える。しかし、意図的な営みは教育の一面にすぎない。意図をもち、目標・人間像をえがき、カリキュラム（教育内容）をととのえ、方法を検討し、プログラムを立て、成果を評価しつつ教育活動にはげむ。教育は、まさに人間の意図的な営みである。

しかし、同時に、無意図的な営みの中におこなわれていく教育もある。そして、そのほうが教育的効果は一層顕著であるといわれる。」と記している。太田は、意図的教育を否定しているのではなく、無意図的教育の上に意図的教育が積み重ねられることにより、（全人）教育がなされるのであり、知識や技術など数字で評されるもののみをもって教育とすることに警告を与えているのである。

3. 太田の意図的教育

太田の「無意図的教育」を考察するにあたって、太田の意図的教育について一瞥する必要がある。

太田は中学校時代、英語教師の柴田俊太郎と出会う。その猛勉強ぶりを、彼は次のように振り返っている。「わたしは、中学時代に、すばらしい先生に出会って、この先生と全人格をもってぶつかった。もちろん、教科——英語のクラス——でも全力をもってぶつかった。単語のアクセント一つでも、確実にわからないものがあれば、必ず辞書でたしかめ、文章のイントネーション（抑揚）も、十分に練習を重ねて教室にのぞんだ。そのおかげで英語がだんだん面白くなり、ついには自分も英語の教師になってしまったのである。

あの頃は、ただのちょっとでも教師の側にあやふやな点があったら承知しないぞ、と意気こんで教室にのぞんだものだ。教師のあげ足をとるのがたのしみだった。『先生ッ』といつでも手をあげる用意があった！『君のような迫力をもった生徒のクラスに出るのは緊張するわい。一回一回が巖流島の決闘みたいなもんだからなァ。やり甲斐がある！ 教師がズボラ出来るようなクラスはつまらん…』先生がある日、こういうことを言って下さったので、わたしはますます調子づいてクラスに出たものだ。毎夜のごとくに、寝言に英語の暗誦を長々とするので、英語はABCもわからない両親が無気味がったり、こんなに勉強ばかりしていたら、この子は気が狂ってしまうのではなかろうか、と両親がひどく心配して、学校を止めてくれないか、と言い出したのも、この頃であった。学問というものには、学ぶ者の側に『真剣に求め』『骨身をけずるような努力』があつてはじめて実を結ぶものである。」⁽⁷⁾

私立中学岡山巒の藤井校長も優れた英語を教える教育者であった。太田が教育者になりたいとの悲願をたてたのは、この中学校での教師たちとの出会いからであった。

「五年の課程を六年かけて卒業し、中学卒業後も父の石切山で石を割り、トロツコを押し、鍛冶屋の仕事などをしながら働いた。徴兵検査を受けて甲種合格。やがて現役兵として入営。わずか二週間足らずで、思いがけないことで兵役免除。その後、上京して父からの仕送りは一文も受けずに」⁽⁸⁾ 夜学に学んだのが法政大学高等師範部英語科。そこで出会ったのが寺西武夫⁽⁹⁾ 東京高等師範学校教授であった。ここでも猛勉強し、学費免除の上、卒業の際、成績優等につき大英和辞典を授与された。寺西のあっせんで宮城県の高川高等女学校に英語の教師として赴任。

「続・矢と歌」⁽¹⁰⁾ に太田は「入りたての生徒に英語を教えることは、田村（註：太田の仮名）にとって大変やりがいのあることであった。それは、白紙に自分の思う通りの画をかくようなものであった。ちょうどハロルド・パーマー教授⁽¹¹⁾ が日本の文部省に顧問として招聘され、彼の唱導する新しい教授法、オーラル・メソッド⁽¹²⁾（日本語を用いないで口と耳を主にしてはじめて英語だけで教える方法）が、英語教育にとり入れられた頃であり、その方法を実践しておどろくべき成果をあげた福島中学校の英語教授法が“フクシマ・プラン”⁽¹³⁾として、天下に紹介されている頃であった。このオーラル・メソッドの旗頭的指導者に、東京高師の寺西武夫教授がいた。田村は法政の夜間部でこの寺西教授の指導を受けて傾倒していたので、わが意を得た思いであった。英語科の先任教师広田と協力して、大胆にオーラル・メソッドによる入門授業をして、かなりの成果があげられた、という自信と誇りをもちかけていた。」と記している。

新任の英語教諭にもかかわらず、自信に満ちた姿がある。続いて赴任した青森中学、水口中学、八尾中学でも太田は優れた英語教育で優秀な生徒を育てた。代表的な人物をあげれば、芳賀馨（青森中学・福島県立医科大学名誉教授⁽¹⁴⁾）、秋野勉（水口中学・元土佐教会牧師）、田中敏弘（八尾中学・関西学院大学経済学部名誉教授）などである。ただし、秋野は「私が太田俊雄先生にはじめて出会ったのは中学1年生の時でした。時は1941年4月、桜咲く入学式の日、場所は滋賀県甲賀郡水口町、県立水口中学校でした。太田先生は私のクラス担任で英語の先生でした。（中略）ある英語の時間のことです。前の席から順に宿題の答えを求められ、私の番になりましたが、宿題ができていなくて困った私は、逆に先生に質問しました。「先程の国語の時間に、教科書の中に、徳富蘆花の文章があり、その中に『レバノンの栄え』とか『ソロモンの栄華』という言葉がありました。国語の先生は、『これは聖書に関係があるが、わしはヤソ教のことはようわからん太田先生に聞け』と言っておられました。これはどういう意味ですか」。太田先生は喜んで旧約聖書から説きおこして詳しく説明して下さいました。そのうちに終業のベルが鳴って、宿題ができていなかった私は無罪放免されました。これに味をしめて、いくつかの質問を用意しておいて、英語の時間に先生にきくことにしました。このようにして、授業を脱線させては喜んでいましたが、あと

になって考えてみれば、「敵もさる者」、この私の質問をよいことにして、太田先生は、戦時中の公立学校の正規の授業の中で聖書のお話キリスト教の話をして“伝道”しておられたのでした。「機を得るも機を得ざるも常に励め」でありました。そして、この私は教会へも行かず、不良学生として先生に反抗しながら実はキリストの救いの網にかかっていたのでした。」⁽¹⁵⁾

「教育とは、〈人間を育てること〉であって、数学や英語や国語を教えることではない。ある人はこのことを数学や英語を〈教える〉のではなくて、数学や英語で人間を教育するのだと言う。」⁽¹⁶⁾ 事の好例でもある。

また、田中は、太田からは中学の授業で直接英語を習ったのではなく、「この英語バイブルを、当時八尾中学の英語の先生だった故太田俊雄先生（元敬和学園高校校長）が八尾中学内で開かれていたバイブル・クラスで初めて習ったのでした。またそれから、私は、先生が布施足代教会で礼拝前にやっておられた英語バイブル・クラスにも欠かさず出席して、英語聖書を読みお話をききました。太田先生が独特の抑揚をつけて英語聖書を読まれるのを聞いていると、その文章のすばらしさ、その整ったリズムなどに大いに心を惹かれてしまいました。これが私の聖書との出会いでした。」⁽¹⁷⁾ また、「私は太田先生の渡米にとっても大きな刺激を受け、1956年に内外協力会を経て、メソジスト教会からスカラシップをもらい、1年ずつアメリカのシラキュース大学大学院とコロンビア大学大学院に学ぶことが出来ました。これも太田先生のおかげとっております。」⁽¹⁸⁾

なお、青森中学では、家庭を開放して「火曜会」、水口中学では「土曜会」、また、八尾中学では「まねび会」として学校を離れた交わり・学びの会が持たれている。

4. 敬和における意図的教育

次に敬和における意図的教育について略述する。

全日制・普通課程として、創立当初のカリキュラム（教育課程）は文部省の高等学校学習指導要領の「B類型」を採用した。⁽¹⁹⁾ これは、国数理社英の主要5教科に重点を置いたいわゆる大学進学を目指す普通科のカリキュラムであった。国語・英語は標準単位より多い増加単位とし、その中で英会話の授業を必修とした。

そのうえに、「敬神愛人」という教育モットーを実現するために、毎朝の「全校礼拝」、および「聖書の授業（1単位）」を必修とした。さらに、初年度は男子のみで実施した「労作」を、2年目から週1時間の必修授業とした。また、行事においても、修学旅行は行わず、毎年2泊3日の「修養会」を実施した。以上が全員に課したプログラムである。その上「寮教育」、太田自らが引率して実施した「海外教室」など意図的な制度としての敬和教育が行われた。

以下主なるプログラムについて診ることとする。

(1) 全校礼拝・聖書

「神を畏れ敬わざる教育をすれば生徒は賢い悪魔になる」⁽²⁰⁾あるいは「主を恐れることは知識のはじめである。(箴言1・7)」⁽²¹⁾として教育モットー「敬神愛人——聖なる神に対する畏敬の念と、人に対する和合、融和の精神を育てていく」を、毎朝の全校礼拝として敬和教育の中心及び土台として位置付けた。また、週1時間の「聖書」を3年間必修とした。

(2) 労作

「すぐれた教育者はかならず、その教育プログラムに勤労をとり入れている。羽仁先生の自由学園、河井道先生の恵泉女学園、小原国芳先生の玉川学園⁽²²⁾…(中略)…労作主義の教育がどれほど生徒の品性を練り、人格を高めるか、誤った教育を受けて来た人々にわからないらしい。ブーカー・ワシントンは『労働の神聖さを学生に教えないような学校は、およそ何の意味もないものだ』と言っている。」⁽²³⁾また、「教育を単なる知識教育や、科学・技術教育と考えず、全人教育の立場に立つ時に、勤労の体験をさせることを、カリキュラムの中に組み入れておく必要をわたしは痛感するのである。この主張は建学の精神の中に重要な位置を占めざるを得ない。」⁽²⁴⁾として太田は「労作教育」を当初から取り入れることを望んだが、あまりに必修単位の多い指導要領B類型のために、女子の家庭科の裏番組として初年度は男子のみの履修とせざるを得なかった。2年目から、全員必修の科目として週1時間組み入れられた。

労作のねらいについて、太田は、「敬和」第15号⁽²⁵⁾に以下のように記している。

「デューイは、作業には次のような性格がある、としている。

1. 社会は作業によって存続する。
2. 作業は、人と世界との間の基本的関係を知らせる。
3. 作業の変遷発展の根底となっているのは、作業のための道具や機会の発展であって、その発展の歴史は、人類の歴史であり、それはまた、人類について理解させる間接の社会学のようなものである。
4. 社会の基底となっている作業を学校にとり入れることは、学校を生きた小形の萌芽的社会 — embryonic community — にすることである。

本校が、労作教育を、非常に不十分な形ではあるが、とり入れているのは、こうして『自由人の形成』が、生徒たちの内になされることをねらいとしているのである。」と、不十分な形でのスタートとなった労作について語っている。

この「真の自由人の形成」には自発性こそ大切であるとする。「自発性のないところに、真の自由人の形成などあり得ない。敬和学園は、真の自由人の形成を、どうしてしようと

しているのか？ 労作教育が、この点で一番大きな役割を演じているように思われる。」⁽²⁶⁾

具体的には、クラス担任が主となり週1時間の労作の授業を展開する。労作主任はおくが、あくまでもアドバイザーとして、技術面や担任が行き詰ったときの助言に徹するので、クラス担任を主とするそのクラスの自主性に任されている。したがって教師・生徒の自発性が大きく問われることになる。非常勤の講師を除いてすべての教師が労作の授業に関わることも大きな特徴のひとつである。また、授業とは別に、入試労作・卒業式労作・入学式労作など生徒のヴォランティアによる特別労作が推奨されている。

「わたしたちは、入学試験だ、保護者会だ、卒業式だと、さまざまな特別行事に、生徒を働かせる。これを『〇〇労作』と呼んでいる。人手が足りないからではない。これこそ〈人間教育〉の絶好のチャンスだからである。一般に希望者を募集するが、多すぎて困れば一部の者には『次のチャンス』を待ってもらおう。

採用されたある生徒が、入試の直前に来て、『先生、入試労作を許可されました…』と感激と喜びに輝く目をして、『先生、どういう心がけが大切ですか？』

『誠実さ、真心だね。テクニックや要領ではないぞ。要領は悪くても構わん、真心で応待しろ』

彼は、ハイッと行って、自分の胸をこぶしで、どんと叩いて、にっこりして出ていった。それが印象的だった。」⁽²⁷⁾

さらに、フェスティバル(学園祭)などの行事でも「一人一役」をキャッチ・フレーズに「自主性・自発性」がいたる場で尊重されている。1977年からは、その前年まで行われていた学年別の「遠足」にかわって、全校労作が行われて現在に至っている。最初は日本北限の茶として知られる村上に出かけての全校茶摘み体験であったが、しばらくして学年別に1日労作が行われ、1年は校内及びその近郷の美化を、2年次は植林や福島潟での労作、3年では、福祉施設や、教会での奉仕というプログラムも実施されている。

(3) 修養会

2泊3日の日程で行われる「修養会」は敬和教育の大切な柱の一つである。創立時から、修学旅行は行わず、原則として学校を離れて学び合い、体験し合う行事である。学年ごとにテーマが決められ、実施される。担任も基本的には3年間、生徒と共に歩むことで生徒の成長に合わせた「修養会」を企画実行できる。そのため、「講師中心型から、生徒の死をきっかけに《生きる意味》についての問いかけ型、さらに生徒自ら体験する行動型へと変わってきている。」⁽²⁸⁾ また、ここでも全教師がいずれかの学年の修養会に参加することになっている。

(4) 寮教育

太田は、敬和の創設にあたって、「全国区の学校」を考えていた。それには、寮の建設が

欠かせない。新潟県・市が無償で提供を申し出た市街地の土地は、7000坪しかなく学校建設には狭すぎた。そこで最終的に示されたのは、新潟市の北部の太夫浜と島見両地区にまたがる約15,000坪の土地であった。定期バスが通っているが、1日に4便という不便な場所であった。彼にとって願ってもないことに、「寮」が出来る最適地であった。⁽²⁹⁾「寮」こそは、人格教育(全人教育)の最適な場でもあったからである。(ちなみに、太田は「寮」とは「寄宿舎」のことであり、教育の場ではないとして「塾」ということばにこだわったが、設立委員会でこの意見が通らず不満であった⁽³⁰⁾)

「寮生活における教育的ねらいは、だから計画的活動にあるのではなくて、むしろ無意図的な教師と生徒とのふれ合いにあるのである。こういうふれ合いの中で、生徒たちは、真に心にのこる教育をされていくのである。これだけ言えば教師の信仰がいかに大切であるかは、おのずからわかって頂けると思う。

教師は、日常茶飯事——いっしょに食事をしたり、風呂に入ったり、将棋をさしたり、遊んだり、論じ合ったり、歌ったり、雑談をしたりしながら知らず知らずのうちに、その人格をさらけ出している。その人格が生徒の心の深みまでくい込んでいく。こういう心と心のふれ合いが意図的・計画的にいとまされる教科の教育活動と相まって、真の人間形成をしていくのであって、わたしが人格形成、人格教育の必要性を強調するのは学力軽視とつながる、などと考えられるのは心外である。この点をよく理解してほしいと思う。」⁽³¹⁾

また、学園が創設されて、初めて3学年がそろった1970年に「寮教育について」と題して「生徒を信頼し、生徒との間に密度の濃い人間関係を保ってさえいれば、生徒はスクスクと育っていく。寮教育だ、人格形成の場だ、と大上段に構えたりしないで日常の平凡な交わりを大切にしていけばよい。自習監督よりも、自由時間の平凡な交わり、ふれ合いの中にこそ寮教育の意味があるのではなからうか？

寮は、愛と信頼感のみなざる、いわば「大きな家庭」にしたいものである。それは集団下宿になり下がってはならない。

温い心の交流、「魂から魂へ」の共鳴のおこるような人間関係がほしい。ここでは真心をもった教師と生徒の間に、はげしい体当たりの人間交渉もおこってほしい。ここでは、監督され、規則を課せられて、やっとならぬに従う受動的人間でなく、規則を与えられなくても、また、監督されなくても自ら進んで自分を規制していこうとする能動的人間を育てていきたい。」⁽³²⁾

と、太田の理想とする寮教育について語っている。裏を返せば、寮の意図的教育としてのプログラムにすら乗ることのできない生徒、また三無主義と言われる無気力で受動的な生徒の増加(太田はこれを、高校の教育以前の「家庭教育」の問題として、幼児教育の大切さを訴えていく)と、教師の力量のなさを憂いているといえよう。

なお、太田は「全寮制」を必ずしも求めてはいないが、3年間に一度は「寮」を体験させたいと考えていた。⁽³³⁾

(5) 海外教室

太田は、開校したばかりの、まだ教育設備の整っていない1969年2月号の「敬和」に「敬和学園の教室」⁽³⁴⁾と題して次のように宣言している。「ところで『教室』とは、いったい何か？ 敬和ではまだまだ程遠い話だが、将来、学校の設備がりっぱに出来上がった時に、設備が立派だからよい教育がなされるかのごとき錯覚をもつことのないようにあえてこの問題を考えておこう。『教室』とは、壁に囲まれ、机やイスや黒板の用意された場所だと言えるのかも知れない。けれども、わたしは敬和学園の生徒を、そういう意味の、狭い教室だけで教育するつもりはない。『世界が敬和学園の教室だ』という主張をまげるわけにはいかない。敬和の生徒は、広い世界の中でのびのびと、堂々と、明るく成長していかなければならない。敬和の教育プログラムは、そのような視野で作られねばならない。」

そして、「海外教室」と命名して希望する生徒を自ら引率して夏休みを利用してアメリカ・カナダへの1ヵ月に及ぶ旅を実施している。

その目的は、

- 「1. 生徒たちが、真の日本人、真の国際人として成長するために、彼らを日本の外に出出して、外国から自分の国を見直させたい。宇宙飛行士は「地球は青かった」と、月世界に近いところからいったが、この生徒たちは太平洋をへだてて日本をいかに見るだろうか？
2. 生徒たちをアメリカ人の家庭に分宿させ、アメリカのふところの中から、アメリカを見直させたい。マス・コミにゆがめられて、彼らの心に印象づけられているアメリカ及びアメリカ人とその目で「ふところ」の中から見たアメリカ人と、どのように異なっているか。それを体験させたい。こういう体験なしに、真の国際的な相互理解が、どれほどむずかしいか！
3. 自分の家庭と父母をはなれて、しかも語学的なハンディキャップをもって、万事に不自由な生活することを通して、彼らに自分の家庭と父母に対する真の誇りと感謝とをもたせたい。
4. こういう体験を通して、彼らに表面的な物の見方、一方的な物の考え方をやめて、その視野をひろげることをさせたい。
5. これはむしろ附随的なことだが、実用英語の力ものばしてやりたいし、キャンプや家庭の中で若人同志の間に、友情の波をひろげて行くことも奨励したい。」⁽³⁵⁾

太田自ら引率して行われた「海外教室」は6年間続けられ、7回目の準備中、太田の病気のため中断を余儀なくされたが、8年後、敬和の教育には欠かせないとして、3週間の

ホーム・ステイによる「海外教室」を再開させたのも太田自身である。⁽³⁶⁾ 太田が引率するのではなく、若い教師の学びになるからと、交代で引率させた。現在もこの形で実施されている。

(6) フリー・レッスン（必修クラブ活動）

創立時に採用したB類型は、必修科目が多く、単位修得できない生徒も多く出た。太田は、教育モットーと特色に「知識・学力を重視する」とうたい「学力を軽視」しない、と表明した時、学習が不十分な生徒は、原級留め置き（いわゆる「留年」）して、修得するまで学ばせるといふ、いわば欧米型の制度を採用した。ところが、留年すると、不認定科目だけでなく、全科目再履修しなければならない「学年制」の壁のため、退学する生徒を出さざるを得ないことになった。そのため、大幅な見直しを行い、完全単位制のシステムを導入した。幸い、1973年度から学習指導要領が改訂され、その前年から移行処置を行ってよいことになったのを機に、フリー・レッスン（必修クラブ活動）を1単位組み込むことにした。これは、教師が教科の授業とは別に、「得意とするもの、興味あるものからテーマを出し、生徒が学年やクラスを越えて参加する」形で行われ、教師・生徒の交わりを深めることを目的に実施された。⁽³⁷⁾

(7) 特別講座（授業）

授業においても、独自の講座が推奨された。「選択聖書」「近代文学」「日本キリスト教史」「敬和数学」「美術史」「集中美術」「英語演習」など、教員の自発的、自主的な講座が選択授業として採用されたのもこの改訂の特色である。⁽³⁷⁾

5. 太田の無意図的教育における教師論

太田は、「無意図的教育の上に意図的教育が積み重ねられること」を力説したが、このように見ていくと〈意図的教育〉としての「フィールド〈場〉」の上に、あるいはその「フィールド〈場〉」を包み込む空気のような存在として「無意図的教育」が考えられていることがわかる。したがって、教師の学力、指導力、品性を含めた全存在がそこで問われるのである。

ここでは太田の教師論について考察する。

太田は全人教育として無意図的教育の重要性を訴え、それには「クリスチャン（あるいは求道者）教師」が何より必要であることを力説する。

「クリスチャン教師の教える学科内容が、ほかの教師と教える学科内容と違うわけではない。しかし教育が技術やテクニクではなくて、教師の人格を通してその人生観・世界観がおのずから生徒の心の中に浸透していくものであれば教師の人格・信仰が教師としての重大な条件になるのは当然であろう。」⁽³⁸⁾

『教師道のバイブル』とは何か？ それはすぐれた『人間の教師』達の伝記である。他人の罪のために十字架を負ったイエスの生涯と教え—いわゆるイエス伝はそのうちで、まず第一にくりかえし読むべきものであろう。由木康先生が『この人を見よ、この人にぞ、こよなき愛はあらわれたる』（賛美歌121番）と詠まれたように、『この人を見よ』である。この人を見れば『生徒を愛する』とは、どういうことかがわかる。生徒のために恥をかき、生徒のためにすすんで重荷を負い、生徒のために夜もすがら泣いて祈れるような教師になりたいと思う。しかも、そうせずにはおられない、パウロの言葉を借りるならば『もしそうしないならば、わたしはわざわざいである』というほどの教育的情熱の持ち主になりたいと思う。⁽³⁹⁾

以下、太田は「真の教師」となるために、「太夫浜卓話」に言葉を尽くして説いている。主なものをあげると、

- *「玉をみがくのだけが教師のつとめではない。石をも心してみがきました、生徒自身にも心してみがさせるのが教師の役目なのだ。玉を高慢不遜にならせ、石を卑屈にならせるようなことをしてはならないのだ。」⁽⁴⁰⁾
- *「人の子の教師たるもの、信仰がなくてはならない。そのことは少しも変らない。しかし信仰があるだけでは教師にはなれない。教師は他のいかなる職業に従事する人よりも人間であることが要求され人格が要求される。」⁽⁴¹⁾
- *「初めから悟りすましたような聖人君子ぶらないこと。迷いつつ、悩みつつ、そしてその中に真剣に生きていく教師を、生徒は尊敬するし、こういう教師こそ生徒に強い影響を与えるであろう。」⁽⁴²⁾
- *「人間味に富んだ、ユーモアを解する、心の広やかな教師であってほしい。」⁽⁴³⁾
- *「教師はあまり教訓めいたことは言わなくてもよい。その人にふれるだけで悩みが解消し心のなごんでくる、そういう人があるものだ。そういう教師になりたいものである。」⁽⁴⁴⁾
- *「教師の生活そのものの中に、生徒が『いつまでたっても心にのこるもの』として、思い出しては心温めるようなものがあるかないか。」⁽⁴⁵⁾
- *「百匹の羊のたとえ話をよく味わって、教師たる者、すべからく不公平・不平等であるべし、とわたしは信じる。一人の生徒をも見殺しにしないために。」⁽⁴⁶⁾
- *「教師も生徒も、見えるものばかりを追求してはならない。真の人格形成の意図的な営みは、そこからはじまる。」⁽⁴⁷⁾
- *「教師の責任は、生徒を排憤させ排憤した時に、はじめて啓発してやることである。折にふれて一隅をあげてみる。十分に予習し、十分に準備し、蓄積している生徒はそれに対して、パッと三隅を示してくる。」⁽⁴⁸⁾
- *「教育の目標は、自己教育のできる人間の育成にあると、たびたび言われる。そして、こ

ういう目標達成のためには、まず教師自身がその目標達成のために、骨身をけずる研鑽を積んでいかねばなるまい。」⁽⁴⁹⁾

そして、究極は太田が敬慕してやまない、小原国芳の説く『師道』である。「昭和四十八年の夏、東京で開かれた、世界教育連盟（WEF）主催の世界新教育会議の研究題目は「教師論」であった。そして、その全体会では連盟の日本会長小原国芳先生が、師道と題して講演をされた。先生はその講演に更に具体例などをつけ加えて『師道』という単行本を出版された。先生は終始一貫して『教育の結論は、教師である』と叫びつづけてこられたお方が、その教師論のまとめとして、先生はこれを『ほんとに、祈りをこめて書』かれたのだ、と思う。これを読めば、教師として立つ以上は、真に良き教師でなくてはならない、という内からの衝動をかりたてられる思いがする。『自己を磨き、生徒たちと共に進む教師。日々新しい生命に燃ゆる教師。全心からほとぼしる熱と光ある教師…』と小原先生の言われるような先生がた」⁽⁵⁰⁾になるようにと、太田自ら教員一人一人に『師道』を贈って、人格教育、全人教育の要となる教師の育成に心血を注いだ。

太田は、漢字すらまともに書けない⁽⁵¹⁾大学出たての若い教師に、「教員免許状」だけで教育できない⁽⁵²⁾と戒めつつ、自主性を重んじ、自由に議論させ、褒めて育てた。

「この使いものにならない若輩をほんとうの教育者に育て上げていくのは、校長の責任のうちの最も大切なものである。もし敬和学園にほんとうの教育者（先生）が育たないなら、それはすなわちわたしの責任である。新卒の教師を迎えてほぼ十年、長いのはもう十四年目。わたしはこの若い教師諸君の成長ぶりに、実は目を見張っているのだ！ 実にすばらしい、飛躍的な成長ぶりを示してくれている。（中略）ちょっと時間をかけて、本校の日常生活を見て下さる他校の先生方が驚嘆して下さるのである。「わたしは今まで三十五年間、いくつかの公立・私立の高校で教鞭をとってまいりましたが、御校のようにピチピチした教師集団をどこでも見たことがありません」と、村上三佐保先生（元教頭）は驚嘆し、若い教師諸君の働きぶりを絶讃しておられた。これに類するお言葉を、実に多くの人々から聞かされて来た。」⁽⁵³⁾

さらに、若い教師たちは、太田の公立中学の英語教師時代に見られたように、「家族ぐるみ」の教育をも展開した。「鈴木ホテル、矢崎ホテル、安積ホテル…」⁽⁵⁴⁾と多くは新潟県外からの生徒家族に我が家を開放した。

6. 結び

「神を畏れ敬わざる教育をすれば生徒は賢い悪魔になる」⁽⁵⁵⁾と「敬神愛人」を教育モットーとして全人教育を掲げて1968年に開校した。

「現代はすばらしい科学の進歩を人間が達成したのは良いとして、その反面、人間が科

学万能主義傾向に毒せられ、思い上がって、本当の教育も本当の学問も、忘れ去られつつある。「愚かなものは心のうちに〈神はない〉と言う」と何千年前の詩人は書き残しているが、科学の進歩と共に、この「愚かな者」が、特に文明国ほど多くなっていると云われている。本当の教育は、こういう愚かな人々を大量増産することではない。物を教えこむことでも、知識を詰め込むことでも、教材をこなすことでもない。本当の教育とは教材・教科書を教え込むことではなく、人間を教え、人格を練成することである。」⁽⁵⁶⁾

これは、太田が校長を辞し、名誉校長となった1984年、中学生向けの敬和ジュニア版に「志を立てる」と題して書かれた一文である。その後約30年も経過し、開校してから間もなく半世紀になるが、太田のこの教育主張は色あせるどころか、ますます冴えわたっている。「真の教育者いでよ！」

註

- (1) 「敬和学園その歩み—創立10周年記念—」 p103-106
- (2) 詩人テニスンの詩句
- (3) ロングフェロウの詩『矢と歌』から、太田の最初の随想集「歌声は消えず」（聖燈社1968.9）の題名
- (4) 太田最後の随想集「感動のおこる時」（オリオン印刷出版部1984.10）の題名
- (5) 「心にのこる教育」（「敬和」第2号（1967.10））
- (6) 「自己教育ができる人間—親と教師への苦言—」（「敬和」第132号（1980.4））
- (7) 「生徒の迫力」（「敬和」第76号（1974.8））
- (8) 「わたしの浪人考」（「敬和」第109号（1978.4））
- (9) 寺西武夫（1898-1965）東京高等師範学校文科三部（英文科）教授、オーラル・メソッドの開拓・推進者の中心の一人、太田が学んだ、法政大学でも教鞭をとっていた。「ディケンズ」（研究社英米文学評伝叢書51（1934））『話方・聴方・書取及び習字』（英語教育叢書6.1935.11）、「英語の手紙の書き方」（1957）、『英語教師の手記』（寺西武夫、吾妻書房1963.3）、「福音書—英和対照」（1964）研究社新訳注双書として「イソップ物語」「アンデルセン童話集」、「英語の話方」（『新英語教育講座』第5巻）など教科書編集を含め著書・訳書多数
- (10) 「続・矢と歌」（聖燈社、1973・12）「署長の感謝状」（p 24-25）
- (11) ハロルド・E・パーマー（Harold E. Palmer 1877.3.6 — 1949.11.16）は、大正・昭和期を代表する応用英語学者・英語教育学者・音声学者。Speechとしての言語（言語運用）と、Codeとしての言語（言語体系）を区別して、これを言語教育に適用し、20世紀の応用言語学の発展に寄与した。またspeechをさらに第一次伝達（Primary Speech）と第二次伝達（Secondary Speech）の二要素に分けている。

オーラルメソッド（口頭教授法）を提唱し、英語教授研究所（現在の財団法人語学教育研究所）を設立して日本の英語教育改善に大きく貢献した。女子学習院、東京文理大、東京外語大の講師も務めた。フランス語が堪能であった。イギリス・ロンドン出身。（ウィキペディア・フリー百科事典）
- (12) オーラル・メソッド（おーらる・めそつど）oral method
口頭作業を重視した外国語教授法。口頭教授法と訳される。1922～36年（大正11～昭和11）に日本の文部省言語顧問であったイギリス人ハロルド・パーマーが提唱した。彼は1921年に著した『The Oral Method of Teaching Languages』によって、この教授法の提唱者とよばれている。オーラル・メソッドは、文法・訳読式教授法などの伝統的な方法に対する反動としておこった革新的教授法の一つである。言語を「規範としての言語」と「運用のための言語」に分け、外国語学習では後者を対象とし、聞き、話すことを優先する。また、言語習得の5習性として、(1) 耳による観察、(2) 口まね、(3) 口慣らし、(4) 意味づけ、(5) 類推による作文、をあげ、習慣形成が強調される。学習にあたっては、(1) 照合一致から (2) 結合合体、そして (3) 総合活用 of の段階に至るべきこと、音声面とともに場面を重視し、英問英答（約束に基づいた定型会話）を中心的活動に置き、入門期には口頭のみによる6週間の指導を原則とし、以後はリーダー中心の総合的指導をすること、などに特色がある。[執筆者：垣田直巳] YAHOO百科事典より
- (13) フクシマ・ブラン；ハロルド・E・パーマーが提唱したオーラル・メソッドによる英語教授法実践校。1930～1936の短い期間であったが、oral、受験の両面ですばらしい成果を挙げ、当時、一世を風靡した。特に1933年10月17日に開催された英語教授研究大会第10回大会（於、東京一橋講堂）で福島中学は公開模擬授業を行い、授業の中で生徒は教師の速い（nativeの倍くらいだったといわれている）英語の質問にも即座に英語で答えていたという。福島ブランは約

200年におよぶ日本の英語教育の歴史の中で、「成功」した数少ない実践の1つとして知られている。受験に関しては、プランを始めた昭和5年以降、口頭教授法（いわゆるOral Method）を部分的に導入したにも関わらず、受験の成績は悪くなることはなかった。

（常時英心：言葉の森から<http://d.hatenablog.com/entry/20100517/1274084821>）

- (14) 「続・矢と歌」（聖燈社、1973・12）「トラ刈り」（p100-106）／クリスチャン・グラフ412（1980.11）「わが心の旅路20」

* 芳賀馨（1927-） 福島県立医科大学名誉教授；パディ・チェイエフスキ論纂（1983.3）、現代アメリカ文学研究（1992.7）、レジナルド・ローズ論集（1995.3）、比較文化学論纂（1998.12）、また開文社・英文選書として「十二人の怒れる男たち」「チャリング・クロス84番地」「印刷工気質」「暴力の季節」「エミリエミリイ」「マーティ」など著書・訳書多数。

- (15) ミニ・クリスチャン・ジャーナル「地の塩・世の光」（526号 1991.1.1）

- (16) 「無題—そこはかと思うまを—」（「敬和」第64号（1973.6））

- (17) 田中敏弘著『岩の上に—学問・思想・信仰—』p15-21）

* 田中敏弘；関西学院大学経済学部名誉教授

1929年 神戸市に生れる。1953年大阪商科大学卒業

1959—61年 シラキュース大学大学院及びコロンビア大学大学院留学, MA.

1974—75年 グラスゴウ大学及びケンブリッジ大学客員研究員

1988年 コロンビア大学客員研究員

主 著 『マンデヴィルの社会・経済思想』（有斐閣、1966）、『社会学者としてのヒュームJ』（未来社、1971）、『経済学へのアプローチ—スミス・マルクス・ケインズの世界—』（玄文社、1972）、『イギリス経済思想史研究』（御茶の水書房、1984）、『アダム・スミスの周辺』（日本経済評論社、1985）

共編著 『近代経済学史』（有斐閣、1980）、『ディヴィッド・ヒューム研究』（御茶の水書房、1987）

訳 書 T. S. ウングル『一般経済学—経済体制の比較分析—』（堀経夫監訳、共訳）

上下（関書院、1959, 1961）、ヒューム『経済論集』（東京大学出版会、1967）、A. S. スキナー『アダム・スミスの社会科学体系』（共訳、未来社、1981）、ヒューム『政治経済論集』（御茶の水書房、1983）、R. D. C. ブラック編著『経済思想と現代』（監訳、日本経済評論社、1988）

- (18) 田中敏弘氏私信より（「太田俊雄先生と私」第2集p44）

- (19) 鷹澤昭一「カリキュラムの変遷」（「敬和学園その歩み—創立10周年記念—」p38-39）

- (20) 「敬和」創刊号（1967.9）

- (21) 「教育姿勢の再建」（「敬和」第22号（1969.7））

- (22) 3人の教育者については、山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（二）」（敬和学園大学・人文社会研究所年報No.9 p27-35に詳しい。

- (23) 「労働と人格形成」（「敬和」第12号（1968.9））

- (24) 「敬和学園の教育—労作教育と国際精神の涵養—」（「敬和の教育」第1号（1978.5））

- (25) 「学ぶ者の心の姿勢—教育の必須条件—」（「敬和」第15号（1968.12））

- (26) 「真の自由人になれ—生徒たちに」（「敬和」第26号（1969.12））

- (27) 「学校の素顔」（「敬和」第83号（1975.5））

- (28) 村川宏「本校の修養会活動について」（「敬和学園その歩み—創立20周年記念—」p66-71）

- (29) 『《寮教育》うらばなし—「試行錯誤をつづけて来た十余年」』（「敬和の教育」第2号（1979.7））／「伸びよ、若者達！」（のぞみ寮「創立5周年記念誌」（1974.2.28））

- (30) 同上

- (31) 「心にのこる教育」（「敬和」第2号（1967.10））

- (32) 「寮教育について」(「敬和」第32号 (1970.6))
- (33) 「精神的な〈離乳〉」(「敬和」第6号 (1968.2))
- (34) 「敬和学園の教室」(「敬和」第17号 (1969.2))
- (35) 「海外教室の目的」(「わたしの『海外教室』—1969年夏の思い出—」新潟県私学振興会報第5号 (1969.9))
- (36) 鷹澤昭一「海外教室」(「敬和学園その歩み—創立20周年記念—」p85-89)／鷹澤昭一「国際的視野に立つ教育—海外研修を中心として—」(「敬和学園その歩み—創立40周年記念—」p103-107)
- (37) 鷹澤昭一「カリキュラムの変遷」(「敬和学園その歩み—創立10周年記念—」p38-39)
- (38) 「心にのこる教育」(「敬和」第2号 (1967.10))
- (39) 「教師道のバイブル」(「敬和」第10号 (1968.6))
- (40) 「秀才と鈍才」(「敬和」第3号 (1967.11))
- (41) 「教師道のバイブル」(「敬和」第10号 (1968.6))
- (42) 同上
- (43) 同上
- (44) 同上
- (45) 「心にのこるもの」(「敬和」第28号 (1970.2))
- (46) 「〈不公平・不平等〉のすすめ」(「敬和」第31号 (1970.5))
- (47) 「見えるものと見えないもの—畏敬の念の回復—」(「敬和」第35号 (1970.10))
- (48) 「教えない教師」(「敬和」第37号 (1970.12))
- (49) 「自己教育ができる人間—親と教師への苦言—」(「敬和」第132号 (1980.4))
- (50) 「先生礼讃」(「敬和」第95号 (1976.7))
- (51) 「一点一画も」(「敬和」第142号 (1981.2))
- (52) 「敬和学園の教育目標」(「敬和」第8号 (1968.4))／「教育姿勢の再建」(「敬和」第22号 (1969.7))／「『学校』がない『教師』がない」(「敬和」第39号 (1971.2))／「教員免許状—このえたいの知れぬもの—」(「敬和」第45号 (1971.9))／「すきま風が吹きこむ」(「敬和」第121号 (1979.5))
- (53) 「機関車の故障—それでも列車は走る—」(「敬和」第151号 (1981.12))
- (54) NHK教育テレビ「宗教の時間」(1982.2.7)
- (55) 「創刊にあたって」(「敬和」第1号 (1967.9))
- (56) 「志を立てる」(「敬和ジュニア版」第181号 (1984.8))

《追記》

山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想」(1)～(3)(敬和学園大学・人文社会研究所年報No.8～No.10)のうち、特に(1)および(2)を参照されたい。